

「まで」節内における「が／の」交替：資料

中 村 嗣 郎

1. 「が／の」交替

日本語には「が／の」交替と呼ばれる格助詞交替の現象があり、Harada (1971)などを始めとして、とりわけ理論言語学の中で研究対象となっている。

- (1) a. なおみは [昨日健が／の読んだ] 本を借りた。
b. なおみは [雪が／の多い] 国へ行った。
(南部 2014 : 6)

南部 (2014) は「が／の」交替を、コーパスを用いた言語変異理論、言語処理・理解などの観点から分析している。「が／の」交替は、節内で「が」でマークされる表現形式が、「本、国」などの名詞が後続する場合、「の」でマークされうる現象である。同様の現象が、「より」「まで」のような従属節内でも観察されることが知られている。

- (2) a. ジョンは [なおみが／の読んだより] たくさん本を読んだ。
b. ジョンは [雨が／のやむまで] オフィスにいた。
(南部 2014 : 45-46)

本稿著者の判断では、(1) に比べ、(2) のよ

うな「より」節や「まで」節の場合は、動詞や名詞を変えると、判断が微妙なケースが存在すると思われる。そこで、本稿では「まで」節内で「が／の」交替が起こっている例にどのようなものがあるのか、小説を中心とした書き言葉からその用例（「の」でマークされた例がその中心）を採集し、その結果を報告する。

2. 採集方法

検索が容易な電子書籍を利用した。作家を1912年生まれの作家から1991年生まれまで生年ごとに分け、それぞれの年につき作家6名ほどを選んだ。6名選ぶのがむずかしい場合は同一作家の複数の作品を対象とした。最も古い時期と新しい時期は例外として、5年ずつ16期に分けることにする。特に記載のない時期は30作品である。

- (3) 第1期 1912-1915年生 (25作品)
第2期 1916-1920年生
第3期 1921-1925年生
第4期 1926-1930年生
第5期 1931-1935年生
第6期 1936-1940年生
第7期 1941-1945年生
第8期 1946-1950年生
第9期 1951-1955年生

「まで」節内における「が／の」交替：資料

- 第10期 1956-1960年生
- 第11期 1961-1965年生
- 第12期 1966-1970年生
- 第13期 1971-1975年生
- 第14期 1976-1980年生
- 第15期 1981-1985年生
- 第16期 1986-1991年生 (21作品)

具体的な作家・作品名については、論文末に記し、そこでの作家の生年—分類番号（たとえば作品番号 64-3 は 1964 年生まれの作家の中の 3 つ目の作品）によって本文内では示すこととする。作家の性別、出身地、言語環境などは考慮していない。また、文章の長さが作品ごとに異なるといったこともあるため、データとしてはそれほど統制がとれていないとも言える。加えて、ここで探している「…の《動詞》まで」というパターンが作品内で使用されているとは必ずしも予測できない。そうではあったが、次節で示すように興味深い結果が出た。検索については、作品一つひとつについて「まで」で検索し、手作業により「が／の」交替に関わる用例を採集した。

3. 結果

すべての対象（466 作品）の中に「…の《動詞》まで」は 126 例あった。便宜上、当該の構文を「の」構文と呼ぶことにする。時期ごとの内訳を記すと以下のとおりである。

表 1 「まで」節内「の」構文の用例数

時期	生年	例数
1	～1915	10
2	～1920	19
3	～1925	20
4	～1930	15
5	～1935	13
6	～1940	16
7	～1945	3
8	～1950	5
9	～1955	9
10	～1960	2
11	～1965	5
12	～1970	1
13	～1975	2
14	～1980	1
15	～1985	4
16	～1991	1

表 1 から明らかなように、採集された「の」構文は減少する傾向にあることが読み取れる。とりわけ、第 6 期までは 2 桁の用例が見つかったが、第 12 期以降はなかなか見つかりにくいことがわかる。

次に、「の」でマークされていてもよい環境にあるが実際には「が」でマークされている用例も採集し、「の」構文の割合も調べた。（当該の名詞句が後続する動詞と隣接していることが好まれるため、そうした用例のみを集めた。）

表2 「が」構文用例数と「の」構文の割合

時期	生年	が例数	の構文割合
1	～1915	102	8.9%
2	～1920	137	12.2%
3	～1925	115	14.8%
4	～1930	132	10.2%
5	～1935	192	6.3%
6	～1940	112	12.5%
7	～1945	170	1.7%
8	～1950	165	2.9%
9	～1955	147	5.8%
10	～1960	147	1.3%
11	～1965	155	3.1%
12	～1970	149	0.7%
13	～1975	126	1.6%
14	～1980	114	0.9%
15	～1985	95	4.0%
16	～1991	77	1.3%

表2からわかるように、数字にややばらつきはあるものの、第6期以前とそれ以降に大きな違いがあると考えることができそうである。

「の」構文126例について以下に示す。基本的に、「まで」に先行する名詞と動詞のみを記すこととする。各用例のあとの数字は論文末に示した作品番号である。

(4) 第1期 (10例)

気の向く (12-1) 冬営の始まる (12-1) 雪の降る (12-6) 自分の全力の碎ける (13-2) 手足の折れる (13-2) スカアルの小さくなる (13-2) 彼の来る (14-1) 指のやける (15-3) 伊佐の近づく (15-3) 伊佐の近づく (15-3)

第2期 (19例)

現場検証の終る (16-4) 手先きの見える (17-1) 納得のゆく (17-2) 応急派兵の命令の来る (17-6) おれの命ずる (17-6) 敵機の遠のいて行く (17-6) 順番の廻ってくる (17-6) 日の暮れる (17-6) トラック隊の到着する (17-6) 全弾の尽きる (17-6) 疑問の余地のない (18-1) 夜の明ける (19-3) 満足のゆく (19-6) 脚の折れる (20-3) 入学試験のすむ (20-3) 看板のおりる (20-3) 髪のはびる (20-3) 受付シメキリの期限のくる (20-3) 光一の死ぬ (20-5)

第3期 (20例)

夜の明ける (21-1) 予備校の始まる (21-1) 御召のある (21-6) おなかのいたくなる (22-1) 大正十二年十月から大正十三年の暮れる (22-3) お気のすむ (22-4) 気の遠くなる (22-5) 重利夫たちの帰ってくる (22-6) その残酷な月の訪れる (22-6) ガスの出る (22-6) 牟礼田の帰ってくる (22-6) 誰かから知らせのある (22-6) 警官のくる (22-6) 小母さんの帰ってくる (22-6) 夜のあける (23-2) 自転車の通り過ぎる (24-2) ほとぼりのさめる (24-3) 夕闇の迫る (24-3) 腰の抜ける (24-3) 三七日の過ぎる (24-3)

第4期 (15例)

夜の白む (26-3) ほとぼりのさめる (26-5) 優勝の決定する (26-5) 気のすむ (26-6) 事件のほとぼりの冷める (27-4) 骨のとろける (27-4) 勝負のきまる (27-5) 着陸指示のある (27-5) 気の済む (28-1) こけのむす (28-3) こけのむす (28-3) こけのむす (28-3) こけのむす (28-3) こけのむす (28-3) 気の済む (29-3)

第5期 (13例)

夫の帰る (31-1) 納得のいく (31-6) 長唄会で

「まで」節内における「が／の」交替：資料

並ぶものがない (32-1) 敵の来る (32-2) 気の
済む (32-3) スペイン内戦のはじまる (32-5)
しかるべき指令の出る (34-3) 連邦からの指令
の出る (34-3) 新しいデータの入る (34-3) そ
れから事故の発生する (34-5) 朝日から電話の
くる (34-6) ヴィデオ・フィルムのつきる (35-
3) ご納得のゆく (35-5)

第6期 (16例)

納得の行く (36-2) ほとぼりのさめる (36-4)
納得のいく (37-2) 店の終わる (37-4) 階下に
足音の立つようになる (37-6) 血の気の差す
(37-6) 車の着く (37-6) 未明から日の高くな
る (37-6) 落下の絶える (37-6) 井斐のなくな
る (37-6) 夜の明ける《作品タイトル》(38-1)
夜の明ける (38-1) 気のすむ (38-3) 直美の目
覚める (39-3) 新しい家の立つ (39-3) あなた
とお父さんの帰る (40-4)

第7期 (3例)

納得のいく (41-2) 戦いの終わる (42-4) 死刑
判決の出る (44-6)

第8期 (5例)

機が満つる (46-4) 玲子の気のすむ (49-2) 納
得のいく (49-4) 気のすむ (49-4) 納得のいく
(50-1)

第9期 (9例)

おまえの口のおさまる (51-3) ほとぼりの冷め
る (51-4) 汽笛の消える (51-5) パーティのは
ねる (51-5) 陸揚げの完了する (52-1) 日の落
ちる (52-5) ほくの生まれる (52-5) 『浦島』
のはじまる (53-3) るりちゃんの気の済む (55-
1)

第10期 (2例)

気の済む (57-4) 映画の始まる (60-3)

第11期 (5例)

気のすむ (61-1) 気の済む (61-6) 気のすむ
(63-2) 納得のいく (64-6) 陽の昇る (65-3)

第12期 (1例)

気の済む (66-2)

第13期 (2例)

気の済む (73-2) 気の済む (74-1)

第14期 (1例)

気の済む (76-3)

第15期 (4例)

気の済む (82-4) こけのむす (82-4) 気の済む
(82-4) 気の済む (84-2)

第16期 (1例)

夜の明ける (87-2)

用例を見て気づくのは、特に新しい時期ほど
特定の表現が目立つということである。「気の
済むまで」「納得のいくまで」「ほとぼりの冷め
るまで」などである。

(5) 「気の済むまで」

気の済む (28-1) 気の済む (29-3) 気の済む
(32-3) 気のすむ (38-3) 玲子の気のすむ (49-
2) 気のすむ (49-4) るりちゃんの気の済む
(55-1) 気の済む (57-4) 気のすむ (61-1) 気
の済む (61-6) 気のすむ (63-2) 気の済む (66-
2) 気の済む (73-2) 気の済む (74-1) 気の済
む (76-3) 気の済む (82-4) 気の済む (82-4)
気の済む (84-2)

(6) 「納得のいくまで」

納得のゆく (17-2) 納得のいく (31-6) ご納得
のゆく (35-5) 納得の行く (36-2) 納得のいく
(37-2) 納得のいく (41-2) 納得のいく (49-4)
納得のいく (50-1) 納得のいく (64-6)

(7) 「ほとぼりの冷めるまで」
 ほとぼりのさめる (24-3) ほとぼりのさめる
 (26-5) 事件のほとぼりの冷める (27-4) ほと
 ぼりのさめる (36-4) ほとぼりの冷める (51-
 4)

このうち (5) に示した「気の済むまで」を
 見ると、18 例中、第 6 期 (~1941 生年) まで
 が 4 例、それ以降が 14 例と、ある意味、新しい
 作品に観察される。「気が済むまで」が何ら
 かの形で「気の済むまで」へと固定化されると
 考えられるかもしれないので、上記 3 パターン
 について「が」構文も見えてみると、次のように
 なる。

(8) 「気が済むまで」
 気がすむ (20-2) 気がすむ (26-2) チロの気が
 すむ (33-6) 気が済む (35-6) 気がすむ (45-
 2) 自分の気がすむ (45-3) 吟の気が済む (48-
 6) 彼の気がすむ (49-4) るりちゃんの気が済
 む (55-1) 京の気がすむ (61-5) ナツッペの気
 がすむ (64-4) 気がすむ (65-4) 気が済む (67-
 1) 気が済む (67-3) 気がすむ (68-1) 気が済
 む (69-2) 気がすむ (70-6) 気が済む (72-2)
 気が済む (75-3) 気が済む (77-1) 気が済む
 (79-4) 気が済む (83-4)

(9) 「納得がいくまで」
 納得が行く (28-1) 納得がいく (49-4)

(10) 「ほとぼりが冷めるまで」
 ホトボリがさめる (19-4) ほとぼりがさめる
 (19-4) ほとぼりがさめる (26-5) ほとぼりが
 さめる (36-4) ほとぼりがさめる (41-5) ほと

ぼりが冷める (46-2) ほとぼりが冷める (51-
 4) ほとぼりがさめる (58-5) ほとぼりが冷め
 る (61-5) ほとぼりが冷める (64-5) 佐々木の
 ほとぼりがさめる (67-5) ほとぼりが冷める
 (69-2) ほとぼりが冷める (74-3) ほとぼりが
 冷める (91-3)

対象とした作品を見る限り、「気が済むまで」
 がよく見られるのはどちらかと言うと新しい時
 期である。また、「納得がいくまで」につい
 ては「納得のいくまで」ほどの数は見られな
 かった。「ほとぼりが冷めるまで」も比較的
 新しい時期に見られると言えよう。「ほとぼ
 り」については 3 つの作品 (26-5, 36-4, 51-4)
 において「が」構文と「の」構文の両方が使
 用されていたことは特筆すべきである。新し
 い時期において「気の済むまで」のようなパ
 ターンになぜ集中するのか、偶然ではないだ
 ろう。

4. おわりに

「まで」節に関する限り、前節の最後で見た
 ように、「の」構文には特異な属性が存在する
 可能性が浮かび上がった。単純に、「の」でマ
 ークしなくなっているというよりも、「気の済
 むまで」のような特定のパターンが「の」構
 文で用いられている。なぜそうした現象があら
 われるのか、理論的な考察が必要だが、それ
 については稿を改めて論じたい。また、用例
 としては見つからなかったが、「○○のできる
 まで」という表現が本のタイトルとして多く
 使われていることを指摘して本稿を閉じるこ
 ととする。

* 本研究は東京経済大学 2015 年度個人研究助

「まで」節内における「が／の」交替：資料

成費（研究課題番号 15-24）による研究成果の一部である。

参考文献

Harada, S. I. 1971. "Ga-no conversion and idiolectal variations in Japanese." *Gengo Kenkyu* 60: 25-38.

南部智史. 2014. 『コーパス言語学および実験言語学に基づく格助詞交替の分析』大阪大学博士論文。

作品一覧

※各生年における作家・作品は順不同である。また作品の長さは異なり、複数の本が合わさった号本もある。

1912 年生まれ

- 12-1 木本正次『黒部の太陽』
- 12-2 杉森久英『暗殺』
- 12-3 武田泰淳『ニセ札つかいの手記』
- 12-4 檀一雄『石川五右衛門』
- 12-5 戸川幸夫『いぬ馬鹿』
- 12-6 新田次郎『強力伝 孤島』

1913 年生まれ

- 13-1 織田作之助『夫婦善哉—正統』
- 13-2 田中英光『田中英光傑作選』
- 13-3 新美南吉『冬を暖かくする童話集』
- 13-4 富士正晴『桂春団治』
- 13-5 蘭郁二郎『幻聴』
- 13-6 青山光二『金銭と掟』

1914 年生まれ

- 14-1 深沢七郎『みちのくの人形たち』
- 14-2 深沢七郎『庶民烈伝』
- 14-3 駒田信二『一条さゆりの性』
- 14-4 駒田信二『好色の戒め』
- 14-5 徳永真一郎『寺田屋おとせ』
- 14-6 八切止夫『寸法武者』

1915 年生まれ

- 15-1 梅崎春生『ボロ家の春秋』

- 15-2 草野唯雄『北の廃坑』
- 15-3 小島信夫『小銃』
- 15-4 小島信夫『女流』
- 15-5 天藤真『大誘拐』
- 15-6 天藤真『陽気な容疑者たち』

1916 年生まれ

- 16-1 五味川純平『御前会議』
- 16-2 五味川純平『ガダルカナル』
- 16-3 五味川純平『ノモンハン』
- 16-4 石沢英太郎『噂を集め過ぎた男』
- 16-5 石沢英太郎『橋は死の匂い』
- 16-6 石沢英太郎『ヒッチコック殺人事件』

1917 年生まれ

- 17-1 斎藤隆介『職人衆昔ばなし』
- 17-2 宮崎康平『まぼろしの邪馬台国 1』
- 17-3 宮崎康平『まぼろしの邪馬台国 2』
- 17-4 柴田錬三郎『戦国旋風記』
- 17-5 島尾敏雄『魚雷艇学生』
- 17-6 伊藤桂一『静かなノモンハン』

1918 年生まれ

- 18-1 有馬頼義『遺書配達人』
- 18-2 有馬頼義『ガラスの中の少女』
- 18-3 福永武彦『忘却の河』
- 18-4 堀田善衛『ラ・ロシュフーコー公爵傳説』
- 18-5 小沼丹『懐中時計』
- 18-6 小沼丹『掠鳥日記』

1919 年生まれ

- 19-1 鮎川哲也『憎悪の化石』
- 19-2 水上勉『雁の寺』
- 19-3 小島直記『福沢諭吉 歴史小説』
- 19-4 檜原一郎『狙撃指令』
- 19-5 大西巨人『地獄変相奏鳴曲』
- 19-6 金達寿『金達寿小説集』

1920 年生まれ

- 20-1 小野寺公二『算学武士道』
- 20-2 多岐川恭『落ちる』
- 20-3 安岡章太郎『ガラスの靴・悪い仲間』
- 20-4 中藪英助『無国籍者』
- 20-5 高木彬光『白昼の死角』
- 20-6 阿川弘之『末の末っ子』

1921 年生まれ

- 21-1 庄野潤三『絵合せ』
- 21-2 藤原審爾『赤い殺意／罪な女』
- 21-3 田中阿里子『のたりのたり春の海』
- 21-4 佐竹申伍『加藤清正』
- 21-5 由良三郎『偽装自殺の惨劇』
- 21-6 五味康祐『十二人の剣豪』

1922 年生まれ

- 22-1 山田風太郎『虚像淫楽』
- 22-2 邦光史郎『異端の殺し屋』
- 22-3 近藤富枝『田端文士村』
- 22-4 三浦綾子『裁きの家』
- 22-5 瀬戸内寂聴『花芯』
- 22-6 中井英夫『虚無への供物』

1923 年生まれ

- 23-1 池波正太郎『原っぱ』
- 23-2 遠藤周作『海と毒薬』
- 23-3 池宮彰一郎『四十七人の刺客』
- 23-4 司馬遼太郎『木曜島の夜会』
- 23-5 隆慶一郎『一夢庵風流記』
- 23-6 佐藤愛子『戦いすんで日が暮れて』

1924 年生まれ

- 24-1 吉行淳之介『原色の街／驟雨』
- 24-2 邱永漢『香港・濁水溪』
- 24-3 網淵謙錠『斬』
- 24-4 山崎豊子『花のれん』
- 24-5 滝口康彦『一命』
- 24-6 黒岩重吾『石に咲く花』

1925 年生まれ

- 25-1 中野孝次『麦熟るる日に』
- 25-2 永井路子『岩倉具視』
- 25-3 胡桃沢耕史『黒パン俘虜記』
- 25-4 菊村到『硫黄島』
- 25-5 杉本苑子『大江戸ゴミ戦争』
- 25-6 辻邦生『廻廊にて』

1926 年生まれ

- 26-1 立原正秋『剣ヶ崎・白い罌粟』
- 26-2 西村望『犬死にせしもの』
- 26-3 宮尾登美子『一絃の琴』
- 26-4 井上光晴『明日』

- 26-5 星新一『妄想銀行』
- 26-6 山口瞳『居酒屋兆治』

1927 年生まれ

- 27-1 結城昌治『軍旗はためく下に』
- 27-2 吉村昭『破獄』
- 27-3 北杜夫『夜と霧の隅で』
- 27-4 安西篤子『色に狂えば』
- 27-5 城山三郎『総会屋錦城』
- 27-6 小川国夫『アポロンの島』

1928 年生まれ

- 28-1 中村正軌『元首の謀叛』
- 28-2 仁木悦子『聖い夜の中で』
- 28-3 田辺聖子『感傷旅行』
- 28-4 澁澤龍彦『高丘親王航海記』
- 28-5 津村節子『紅梅』
- 28-6 神吉拓郎『私生活』

1929 年生まれ

- 29-1 色川武大『離婚』
- 29-2 竹西寛子『兵隊宿』
- 29-3 郷静子『れくいえむ』
- 29-4 日野啓三『夢の島』
- 29-5 向田邦子『思い出ランプ』
- 29-6 皆川博子『死の泉』

1930 年生まれ

- 30-1 和久峻三『鏡のなかの殺人者』
- 30-2 林京子『やすらかに今はねむり給え』
- 30-3 西村京太郎『終着駅殺人事件』
- 30-4 野坂昭如『アメリカひじき 火垂るの墓』
- 30-5 大庭みな子『オレゴン夢十夜』
- 30-6 開高健『裸の王様』

1931 年生まれ

- 31-1 有吉佐和子『悪女について』
- 31-2 小松左京『さよならジュピター』
- 31-3 三浦哲郎『忍ぶ川』
- 31-4 団鬼六『花と蛇 1 (誘拐の巻)』
- 31-5 深田祐介『炎熱商人』
- 31-6 山村美紗『花の棺』

1932 年生まれ

- 32-1 平岩弓枝『塹師』
- 32-2 高井有一『この国の空』

32-3 黒井千次『カーテンコール』

32-4 小田実『「アボシ」を踏む』

32-5 五木寛之『戒厳令の夜』

32-6 石原慎太郎『聖餐』

1933 年生まれ

33-1 森村誠一『高層の死角』

33-2 生島治郎『追いつめる』

33-3 赤江瀑『八雲が殺した』

33-4 泡坂妻夫『折鶴』

33-5 渡辺淳一『光と影』

33-6 半村良『岬一郎の抵抗 1』

1934 年生まれ

34-1 長部日出雄『鬼が来た—棟方志功伝』

34-2 筒井康隆『朝のガスパール』

34-3 眉村卓『消滅の光輪』

34-4 灰谷健次郎『兎の眼』

34-5 内田康夫『後鳥羽伝説殺人事件』

34-6 井上ひさし『吉里吉里人』

1935 年生まれ

35-1 角野栄子『魔女の宅急便』

35-2 阿刀田高『ナポレオン狂』

35-3 大江健三郎『人生の親戚』

35-4 李恢成『砧をうつ女』

35-5 紀田順一郎『第三閲覧室』

35-6 倉橋由美子『老人のための残酷童話』

1936 年生まれ

36-1 柳田邦男『狼がやってきた日』

36-2 豊田行二『サファリの誘拐者』

36-3 伴野朗『暴露（スクープ）』

36-4 梁石日『血と骨』

36-5 難波利三『てんのじ村』

36-6 志水辰夫『行きずりの街』

1937 年生まれ

37-1 尾辻克彦『父が消えた』

37-2 佐木隆三『身分帳』

37-3 庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』

37-4 山口洋子『半ダースもの情事』

37-5 安部譲二『塀の中の懲りない面々』

37-6 古井由吉『野川』

1938 年生まれ

38-1 北原亜以子『夜の明けるまで』

38-2 竹田真砂子『あとより恋の責めくれば』

38-3 平井和正『幻魔大戦』

38-4 豊田有恒『知謀の虎 猛将加藤清正』

38-5 井原まなみ『悪魔の果实殺人事件』

38-6 夏樹静子『第三の女』

1939 年生まれ

39-1 浅川純『カイシャを辞めて就く仕事』

39-2 高杉良『燃ゆるとき』

39-3 瀧澤美恵子『ネコババのいる町で』

39-4 南里征典『禁断の応接室』

39-5 辺見じゅん『男たちの大和』

39-6 阿木慎太郎『左手の復讐者』

1940 年生まれ

40-1 日下圭介『木に登る犬』

40-2 志茂田景樹『黄色い牙』

40-3 村松友視『カミュの客人』

40-4 加堂秀三『涸滝』

40-5 西木正明『虚名』

40-6 森瑤子『情事』

1941 年生まれ

41-1 東理夫『ワイキキ探偵事務所』

41-2 市川森一『夢暦 長崎奉行』

41-3 佐藤雅美『江戸繁昌記』

41-4 田中光二『大放浪』

41-5 長坂秀佳『浅草エノケン一座の嵐』

41-6 井谷昌喜『クライシス F』

1942 年生まれ

42-1 嵐山光三郎『ざぶん 文士温泉放蕩録』

42-2 柘植久慶『東京大地震 2023』

42-3 溝口敦『生贄の祀り』

42-4 福本武久『新島八重おんなの戦い』

42-5 佐々木敏『逃げるシンカー—中途採用捜査官』

42-6 篠原勝之『走れ UMI』

1943 年生まれ

43-1 小泉武夫『夕焼け小焼けで陽が昇る』

43-2 風間一輝『片道切符』

43-3 深谷忠記『黙秘』

43-4 大鐘稔彦『緋色のメス』

- 43-5 檜山良昭『最後の七日間』
43-6 逢坂剛『カディスの赤い星』

1944 年生まれ

- 44-1 鳥越碧『漱石の妻』
44-2 船戸与一『虹の谷の五月』
44-3 出久根達郎『佃島ふたり書房』
44-4 渡辺房男『儲けすぎた男—小説・安田善次郎』
44-5 椎名誠『白い手』
44-6 小嵐九八郎『真幸くあらば』

1945 年生まれ

- 45-1 宮城谷昌光『子産』
45-2 車谷長吉『赤目四十八瀧心中未遂』
45-3 白川道『天国への階段』
45-4 池澤夏樹『スタイル・ライフ』
45-5 谷恒生『マラッカ海峡』
45-6 辻原登『村の名前』

1946 年生まれ

- 46-1 高樹のぶ子『光抱く友よ』
46-2 岩阪恵子『淀川にちかい町から』
46-3 中上健次『岬』
46-4 鳥羽亮『剣の道殺人事件』
46-5 広川純『回廊の陰翳』
46-6 原リョウ『私が殺した少女』

1947 年生まれ

- 47-1 帯木蓬生『閉鎖病棟』
47-2 小杉健治『絆』
47-3 津島佑子『光の領分』
47-4 高橋克彦『蒼い記憶』
47-5 山崎洋子『花園の迷宮』
47-6 北方謙三『渇きの街』

1948 年生まれ

- 48-1 沼田まほかる『ユリゴコロ』
48-2 連城三紀彦『恋文』
48-3 かんべむさし『サイコロ特攻隊』
48-4 藤原伊織『テロリストのパラソル』
48-5 赤川次郎『悪妻に捧げるレクイエム』
48-6 ねじめ正一『商人』

1949 年生まれ

- 49-1 黒川博行『キャッツアイころがった』

- 49-2 藤堂志津子『熟れてゆく夏』
49-3 佐藤洋二郎『夏至祭』
49-4 雨宮早希『EM (エンパーミング)』
49-5 宇江佐真理『深川恋物語』
49-6 関川夏央『水の中の八月』

1950 年生まれ

- 50-1 海野碧『水上のPASSACARIA』
50-2 山田正紀『地球・精神分析記録』
50-3 佐々木譲『廃墟に乞う』
50-4 藤田宜永『愛の領分』
50-5 米原万里『オリガ・モリソヴナの反語法』
50-6 リービ英雄『千々にくだけで』

1951 年生まれ

- 51-1 夢枕獏『大江戸釣客伝』
51-2 大石静『四つの嘘』
51-3 藤本ひとみ『離婚まで』
51-4 折原一『冤罪者』
51-5 浅田次郎『鉄道員 (ぼっぼや)』
51-6 東郷隆『大砲松』

1952 年生まれ

- 52-1 飯嶋和一『出星前夜』
52-2 中島らも『今夜、すべてのバーで』
52-3 小川竜生『極道ソクラテス』
52-4 小池真理子『沈黙のひと』
52-5 中井紀夫『山の上の交響楽』
52-6 姉小路祐『動く不動産』

1953 年生まれ

- 53-1 平安寿子『素晴らしい一日』
53-2 石川真介『不連続線』
53-3 栗本薫『絃の聖域』
53-4 矢口敦子『償い』
53-5 神林長平『言壺』
53-6 松井今朝子『吉原手引草』

1954 年生まれ

- 54-1 江上剛『円満退社』
54-2 上野哲也『ニライカナイの空で』
54-3 井沢元彦『猿丸幻視行』
54-4 諸田玲子『四十八人目の忠臣』
54-5 山口雅也『日本殺人事件』
54-6 盛田隆二『ストリート・チルドレン』

1955 年生まれ

- 55-1 唯川恵『肩ごしの恋人』
- 55-2 花村萬月『皆月』
- 55-3 藤原智美『運転士』
- 55-4 見延典子『指輪』
- 55-5 赤井三尋『翳りゆく夏』
- 55-6 篠田節子『ハルモニア』

1956 年生まれ

- 56-1 首藤瓜於『脳男』
- 56-2 小手鞠るい『欲しいのは、あなただけ』
- 56-3 山本弘『MM9』
- 56-4 安東能明『鬼子母神』
- 56-5 笙野頼子『タイムスリップ・コンビナー
ト』
- 56-6 荻原浩『明日の記憶』

1957 年生まれ

- 57-1 石川溪月『煙が目にしみる』
- 57-2 緒川怜『霧のソレア』
- 57-3 石井睦美『皿と紙ひこうき』
- 57-4 横山秀夫『陰の季節』
- 57-5 柴田哲孝『TENGU』
- 57-6 大崎善生『パイロットフィッシュ』

1958 年生まれ

- 58-1 翔田寛『誘拐男』
- 58-2 高田崇史『QED 百人一首の呪』
- 58-3 坂東眞砂子『曼荼羅道』
- 58-4 川上弘美『蛇を踏む』
- 58-5 大石直紀『バレスチナから来た少女』
- 58-6 姫野カオルコ『リアル・シンデレラ』

1959 年生まれ

- 59-1 貴志祐介『天使の囁り』
- 59-2 朝井まかて『恋歌』
- 59-3 片山恭一『世界の中心で、愛をさけぶ』
- 59-4 藤沢周『ブエノスアイレス午前零時』
- 59-5 山田詠美『A2Z』
- 59-6 大原まり子『戦争を演じた神々たち』

1960 年生まれ

- 60-1 飛浩隆『象られた力』
- 60-2 朝倉かすみ『田村はまだか』
- 60-3 多和田葉子『犬婚入り』

- 60-4 石田衣良『4TEEN』
- 60-5 乃南アサ『凍える牙』
- 60-6 中山可穂『白い薔薇の淵まで』

1961 年生まれ

- 61-1 蘇部健一『六枚のとんかつ』
- 61-2 島田雅彦『退魔姉妹』
- 61-3 いとうせいこう『想像ラジオ』
- 61-4 服部真澄『鷺の驕り』
- 61-5 歌野晶午『葉桜の季節に君を想うというこ
と』
- 61-6 北森鴻『花の下にて春死なむ』

1962 年生まれ

- 62-1 町田康『きれぎれ』
- 62-2 藤野千夜『夏の約束』
- 62-3 小川洋子『妊娠カレンダー』
- 62-4 原田マハ『楽園のカンヴァス』
- 62-5 小林泰三『玩具修理者』
- 62-6 市川拓司『そのときは彼によろしく』

1963 年生まれ

- 63-1 森福都『長安牡丹花異聞』
- 63-2 若竹七海『悪いうさぎ』
- 63-3 深水黎一郎『言霊たちの反乱』
- 63-4 夏石鈴子『家内安全』
- 63-5 重松清『ビタミンF』
- 63-6 池井戸潤『下町ロケット』

1964 年生まれ

- 64-1 殊能将之『ハサミ男』
- 64-2 中島京子『小さいおうち』
- 64-3 岡本賢一『鍋が笑う』
- 64-4 村山由佳『ダブルファンタジー』
- 64-5 法月綸太郎『生首に聞いてみろ』
- 64-6 恩田陸『中庭の出来事』

1965 年生まれ

- 65-1 大村友貴美『首挽村の殺人』
- 65-2 蓮見恭子『女騎手』
- 65-3 安達千夏『あなたがほしい je te veux』
- 65-4 山田宗樹『直線の死角』
- 65-5 佐川光晴『おれのおばさん』
- 65-6 星野智幸『俺俺』

1966 年生まれ

- 66-1 いしいしんじ『ある一日』
 66-2 大道珠貴『しょっぱいドライブ』
 66-3 垣根涼介『君たちに明日はない』
 66-4 酒井順子『負け犬の遠吠え』
 66-5 加納朋子『ななつのこ』
 66-6 絲山秋子『沖で待つ』
1967 年生まれ
 67-1 宮下奈都『よろこびの歌』
 67-2 日明恩『ギフト』
 67-3 曾根圭介『鼻』
 67-4 柳広司『ジョーカー・ゲーム』
 67-5 不知火京介『マッチメイク』
 67-6 角田光代『対岸の彼女』
1968 年生まれ
 68-1 森絵都『永遠の出口』
 68-2 柳美里『フルハウス』
 68-3 吉田修一『パーク・ライフ』
 68-4 阿部和重『グランド・フィナーレ』
 68-5 福井晴敏『Twelve Y. O.』
 68-6 鷺沢萌『大統領のクリスマスツリー』
1969 年生まれ
 69-1 中村航『リレキショ』
 69-2 長沢樹『消失グラデーション』
 69-3 近藤史恵『サクリファイス』
 69-4 麻耶雄嵩『隻眼の少女』
 69-5 菅田哲也『ハンゲ』
 69-6 和田竜『村上海賊の娘』
1970 年生まれ
 70-1 小野正嗣『九年前の祈り』
 70-2 川瀬七緒『よろずのことに気をつけよ』
 70-3 三崎亜記『失われた町』
 70-4 乾ルカ『メグル』
 70-5 椰月美智子『しずかな日々』
 70-6 池上永一『バガージマヌパナス』
1971 年生まれ
 71-1 岩城けい『さようなら、オレンジ』
 71-2 藤井太洋『Gene Mapper-full build-』
 71-3 伊藤たかみ『八月の路上に捨てる』
 71-4 伊坂幸太郎『アヒルと鴨のコインロッカー』

- 71-5 桜庭一樹『私の男』
 71-6 松田桂『宇宙切手シリーズ』
1972 年生まれ
 72-1 栗田有起『ハミザベス』
 72-2 有川浩『植物図鑑』
 72-3 円城塔『道化師の蝶』
 72-4 関口尚『プリズムの夏』
 72-5 長嶋有『夕子ちゃんの近道』
 72-6 田中慎弥『共喰い』
1973 年生まれ
 73-1 初野晴『水の時計』
 73-2 村崎友『風の歌、星の口笛』
 73-3 舞城王太郎『阿修羅ガール』
 73-4 恒川光太郎『夜市』
 73-5 仁木英之『僕僕先生』
 73-6 柴崎友香『春の庭』
1974 年生まれ
 74-1 瀬尾まいこ『図書館の神様』
 74-2 赤染晶子『乙女の密告』
 74-3 伊藤計劃『ハーモニー』
 74-4 伊藤計劃『虐殺器官』
 74-5 大門剛明『雪冤』
 74-6 大門剛明『罪火』
1975 年生まれ
 75-1 横関大『再会』
 75-2 近田篤途『かんがえるひとになりかけ』
 75-3 中里友香『黒十字サナトリウム』
 75-4 小川一水『老ヴォールの惑星』
 75-5 道尾秀介『カラスの親指』
 75-6 平野啓一郎『ドーン』
1976 年生まれ
 76-1 万城目学『鹿男あをによし』
 76-2 矢野隆『蛇衆』
 76-3 川上未映子『乳と卵』
 76-4 三浦しをん『むかしのはなし』
 76-5 鹿島田真希『冥土めぐり』
 76-6 葉真中顕『ロスト・ケア』
1977 年生まれ
 77-1 古川春秋『ホテルブラジル』
 77-2 澤田瞳子『満つる月の如し』

- 77-3 石井光太『物乞う仏陀』
77-4 沖方丁『天地明察』
77-5 三日月拓『シーズンサンダースプリント』
77-6 坂井希久子『こじれたふたり』
1978 年生まれ
78-1 米澤穂信『氷菓』
78-2 夏川草介『神様のカルテ』
78-3 津村記久子『君は永遠にそいつらより若い』
78-4 伊兼源太郎『見えざる網』
78-5 山崎ナオコ『論理と感性は相反しない』
78-6 乙一『箱庭図書館』
1979 年生まれ
79-1 宮内悠介『盤上の夜』
79-2 国広正人『穴らしきものに入る』
79-3 村田沙耶香『星が吸う水』
79-4 塩田武士『盤上のアルファ』
79-5 森見登美彦『ペンギン・ハイウェイ』
79-6 本谷有希子『嵐のピクニック』
1980 年生まれ
80-1 藤野可織『バトロネ』
80-2 辻村深月『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ。』
80-3 辻村深月『鍵のない夢を見る』
80-4 又吉直樹『火花』
80-5 河原れん『瞬』
80-6 河原れん『聖なる怪物たち』
1981 年生まれ
81-1 山田悠介『リアル鬼ごっこ』
81-2 山田悠介『パラシュート』
81-3 柚木麻子『ランチのアクセちゃん』
81-4 柚木麻子『終点のあの子』
81-5 生田紗代『オアシス』
81-6 樋口直哉『大人ドロップ』
1982 年生まれ
82-1 豊島ミホ『青空チェリー』
82-2 豊島ミホ『花が咲く頃いた君と』
82-3 松波太郎『LIFE』
82-4 滝口悠生『寝相』
82-5 支倉凍砂『狼と香辛料』

- 82-6 葵せきな『マテリアルゴースト』
1983 年生まれ
83-1 相沢沙呼『午前零時のサンドリヨン』
83-2 梓崎優『叫びと祈り』
83-3 新庄耕『狭小邸宅』
83-4 白岩玄『野ブタ。をプロデュース』
83-5 青山七恵『ひとり日和』
83-6 金原ひとみ『マザーズ』
1984 年生まれ
84-1 森川智喜『キャットフード』
84-2 森川智喜『スノーホワイト』
84-3 綿矢りさ『蹴りたい背中』
84-4 綿矢りさ『かわいそうだね?』
84-5 芦沢央『罪の余白』
84-6 橋本長道『サラのやわらかな香車』
1985 年生まれ
85-1 清瀬マオ『なくこころとさびしさを』
85-2 羽田圭介『スクラップ・アンド・ビルド』
85-3 羽田圭介『盗まれた顔』
85-4 二宮敦人『夜までに帰宅』
85-5 二宮敦人『小指物語』
85-6 神秋昌史『精霊医は勇者の変態を癒せるのか!?!』
1986 年生まれ
86-1 彩瀬まる『花に眩む』
86-2 彩瀬まる『川と星』
86-3 今村友紀『コルクを抜く』
86-4 神郷智也『枯れ行く孤島の殺意』
86-5 日日日『私の優しくない先輩』
86-6 日日日『ビスケット・フランケンシュタイン』
1987 年生まれ
87-1 片川優子『明日の朝、観覧車で』
87-2 堀井拓馬『なまづま』
87-3 木爾チレン『溶けたらしぼんだ。』
1988 年生まれ
88-1 菅原和也『さあ、地獄へ堕ちよう』
88-2 木堂椎『りはめより100倍恐ろしい』
88-3 早坂吝『○○○○○○○○殺人事件』
1989 年生まれ

89-1 朝井リョウ『桐島，部活やめるってよ』

89-2 朝井リョウ『もういちど生まれる』

89-3 河崎愛美『あなたへ』

1990 年生まれ

90-1 天沢夏月『サマー・ランサー』

90-2 三秋縋『三日間の幸福』

90-3 三秋縋『いたいなのいたいの，とんでゆけ』

1991 年生まれ

91-1 青崎有吾『体育館の殺人』

91-2 阿部智里『烏に単は似合わない』

91-3 張間ミカ『楽園まで』

